俳諧一葉集

壱

へ 5
4110
1

門 へ 利 5
4110
1-9

芭蕉翁發句附合文章茶話俳外遺語消息也一代之風藻雖不可盡于茲所謂親靚於古書收藏於池庫者悉以彙焉

俳諧一葉集

前後篇九冊

東都中橋北槙町

一具菴藏梓

序

俳諧者非常道而中格妙門也世人妄謂一時戲言綺語也豈夫然耶蓋能致知而達理之常變氣之順逆固守自得遊心於太虚則語默作之無有不善故

明治十七年一月十日依田学海氏寄贈

棄名利而造之靜安可獲焉誠
意而為之身脩家整擧不外乎
此矣昔從芭蕉啟正風雲從風
靡今雖其流間有溯者泝源者
亦不少也屬者社友集録翁一
期所嘯以為小冊以便巻懷可
謂夜行珠矣傳曰法不自顯弘
之在人湖子其人乎是為序

文政十亥歳四月

仙波僧正書于薝蔔

林中之谷神齋

俳諧一葉集序

花になくうくひすみつにすむ蛙の声をきけは
生としいけるものいつれの歌をよまさりけるとのや
家にきく人によみきを詩と俳諧とにそへつると
ありくへしそもし芭蕉庵桃青翁八三十路あまりは
よりよう佛頂禅師について参禅しおきひそかに
花月の的嫁に俳諧の底をきくほしして七情にくはて
称ひをもとみふるきをしらくて渾沌を法して性をて
古人もしと代々の幹風を轉して古今集の大以の以

歌にすらおよぶ杜律山家集の弊をあらためて貞
享の秋季はじめて狂句に絶妙の風雅を発し人
情を述句に寓し文章我記録にそなへて旅に
道の称とはいふなれば世の諸生およそ四海にあふぎ
る丈ともを徳を知れ桃青郎と翁まくも称す門弟
子国々にみちして風を慕ふ人幾ばくといふ
数をしられぬこれとも応を呑て胃をあらひ
大家に通しられおのれのふれ予斗筲の量殊
に遥去に生れ師友なくむなしく此の称ひかられ

此れひとは古学流とはかりて祖翁の一世にくら
ますます拙し物をはかりて世にもてしくをこ
と受くやと発句より消息遺語の志けきまで至れまでし
けて集めし其ひとつ葉の一といふにあふひとて俳諧一
葉集と題し梓にのぼせよとすすめられどもかねて訂し
ゆゑに正す所非なる是ありてまさしく村肝をきさ
みさかれし舎を道寄につれれハ三年まちしなふほど
いふ頃にひとしるすに友人坎窩の函底をさがさ
全をてらかさうなりぬれの時にはまて大事に

ならを黄さんよりハ志つの此心境に入てあそんすれハおは
うたよみ人の心法を捨ていふに千句代を娯み水干
遊き水千ちかく勉て巧拙を争ひ一生を名利に
あやまりそむるはたけ悲しや俳諧を勉て来迷ふ俳諧を
くるしむる女のちり俳諧をいふへしとて老翁
乃詞をうつして巧出の始に筆す

文政丁亥仲秋

江辟東湖中

凡例

一 発句の部寛文延宝天和時代のものハ四季ともに帖のはしめに定貞享元禄のものハおのおのそれそれ季題によりて載せ季のものハ巻末に出す

一 同頼しき集々を名句式ハ記御の法式ハ俳友の詩に傳へし古書に所見あるも私に粋くまてかくのことし何れハ考證として季としの末に載

一 附合の部ハ延宝より元禄まて年歴にしたかひ次第せす祖翁一季の流にもとつきしもの

一同二句三句或ハ五句七句発句の類ハ季寄の末ニ載
一同古集大かた寛文中ハ宗房と有り延宝天和ニ至りて
桃青或ハ芭蕉とあり貞享よりしハ翁と有り続て
見て徴すへし
一文の部序跋の類ハ不猫蛇ニ越人の此なるもゆるはし
或ハ女まゝ其様掃の従翁の作なるを撰し然
れとも文集ニ洩らもしハ入れハみるへき者に
稜なけれハ来帖ニ載
一文混合ししるハ辞従ゆのたくひのことにあらへき

紀行なとの中ニ在て粗略なる有り精なる有り文稱き
物も之なくし記せし故人の声をまつ
遺語の部祖翁の語ハあまく一部の残れてもるへし
紀すへき之のひとくしさ峯
一同句の書にれみしのく此書ハおくゆきものを大
同小異て私ニ服きんへもけうりあれハ重複なるつら
載

俳諧一葉集　発句春之部

古学庵仏兮　幻窓湖中　編

坎窩久蔵　校

寛文延宝天和年中

庭訓の往来誰か文庫より今朝の春

発句なり芭蕉桃青宿の春

於年を棚へあけてやいなおさめ

年や人にとられていつも若夷

歯朶の葉もかさねてもらひの読初

かびたんもつくばゝせけり君が春

もて来つる是ぞ手まりゝ玉
指折て春ゝ大丸哉春と云ゝ
元の新句
餅を寫す折詣当梁の字 枕
季吟勅進を請
和泉の坂とふや出やうの八重くまみ
此梅手生さ袖を此川色し
古河の梅や額濵の二年 越
梅ゝやちらゝ松ちゝ京右郎
志津しまみ尾もすりぬ妻の鶏
梅 梅さそ若魚うれ女うふ
杉風筆画

さゝけよう二月中旬より川都子
去年八そやそえく まさ孫よ次郎月
狂言の妻へつひの扇れよりかよひ
蓬ゝすゝく白魚やとうハ消ぬ頃
石川小腹生の谷中山店子参りて
厨へんとて芹の飯みさんて深川まて
持来られ青泥坊庭の芹ヿ知るまを
千代の饒よとふ手おなし
参る句への鵑哺味す芹の食
此しまんや菓子芹焼をも入ても 籾
さらされ 梅手すて了り 風をとれ
梅咲や白の挽木のよそ者り

竹内一枝将之
幸手自へ梅花一枝のこゑさゝね
ほらなる風や面しさらくむ　梅数
餅ならとしく冬とあすやなむ小
なひのん菩提の縁を前はかれ
言て魚手價ける了てさらみなれ
菅摘て負なる女　操手よ家
内裡雛人形天皇の御字とかや
名所八体の内　二句
貝よする風の手まかや和哥の浦
姨石にて悼すてしらるきてすゝ
揺けんや葉を木枯の終らもして

山吹の葉の葉の色のかゝち白なるや
夏是方知酒聖貧婚覚珠袮
花すらむ世の酒もかく食足し
雨降られハ
半腹の風おりて降らむ山休らう
嵐の前ま花しもしてや繊月
花え雛の月も尺しなり見劉
うちら山やお坊しらはの色さうう
巣の先手も咲きらり桜海苔
紅毛も花手末手らり哥手鎗
姥桜咲ややむ後のおすひむ
糸さらこや垂るさくの足もつれ

吹風の尾羽くあるや大さゝら
艶ある奴もたるや緋の袴
まだしきは冬く花の風
秋瀬さし人しもたくりけり
うまれくる人やちるさくみ山桜
花の中にも岩白雲に後れて
若手の奴あけきや寄り衣
春風に吹出し笑ふもまつふ
よし野花や春三郎かよしの山
てきちよくみえてふ来るやもたる酒
秋も手いのち七十五年経き
傍らしや露なる花ぬ清酒ぬめり妻

先知や宜竹か尺八千もの室
京れぬ万丸子群集の花見かな
氏もよし生きもよしや春の桃
道安の附
ちよと飽らは友かや白紙活るれ
李白芭蕉を贈る
花を残し桃て見やむ萩の二葉紙
貞享元禄年中
まさや新手 古き米五升
庵を訪ひて
いく霜すこし 芭蕉の松かな

山家述志

誰聟ぞ歯朶に餅おふうしの年
伊勢の宮家も本より千代の春
嵐雪か寺ゟ正月小袖を送られハ
誰やらが姿に似たり今朝の春
去年の餅をしまんと旧友の来りて
酒興しけるに

初の尺をつして
二日にもぬかりはせじな花の春
毎年に繁多の隙ゆへ爰にハ仏製の
ちらちらふをとて粧
数鳥ましみ紀たるに春此庵ハかかと

京ちかき心にすすまりて
こもをきて誰人ゐます花の春
此句の時京に庵をむかふ好三
ね紀を写て髭四日
大津絵の筆のはしめハ何仏
人も見ぬ春や鏡のうらの梅
ましや旅に見をとむるさとの酒
見られ田舎のねしろ忘しけれ
蓬莱に聞はや伊勢の初便
みなしにおくゆかしむ友も有
古畑や薺摘行男とも
一とせに一度つまるゝ薺哉

蕣手をかれ支の何れかの葉哉

風麦亭

来て見れハ此羽山のあれ

大々枝や一ト此字を引て一つまみ

来ぬれや名もなき山の朝霞

正月も見渡して近江や閏月

うぐひすの笠落したる椿かな

右五句あるし

黄なるすも悲しの折それやしれ

掌や梅のうしろ藪の前

うぐひすや餅に糞する椽の先

ある人の声と書付けて侍る

我もよのつねしき気しらぬその日の

ひらく梅をしかさへた垣穂

此梅さうなくくとりて持ちん

あるしとひらかれハかのその日の隣

の梅そさきりぬとやすまいたし

鼻うしなひて頃侍りとて

梅さらすれ梅さくその垣根

伊賀の内も合へし

桃

鳥 有ふ年も梅に来てようり

坊山源

梅さわしきものや野をぬすかれし

蝶咲てはかなきかる年しきかな

紅梅や天女の衣つまはさみ　桂

梅折て樵すゝむる枝一句　南

山里は万歳遅し梅の花

芭蕉翁

此古人なとの心をしたふうめの花

卓袋亭月待

月待や梅かたけゆく小山伏

山家

手鼻かむ音さへ梅のさかりかな

伊賀の山家にうつりし時物あらく法師

よりおくりし薪とて石をも添へけ

るにはあはれ思ひめしてあはしき

是あかつきの夢にする梨野也これをまた

て日本紙にうつして物ひとつの手や

侍らば此文字のみ残らぬまんとし

めでたし

是に見へしゆはら雪に梅の花

一とせ都の旅寝にむねをいたする花

まはり御の侍に知人になりて侍るに

此ちみちの折く天に通ふよし客

菅原をば詠じられは

又もとく藪の中なる梅の花

伴艸ぬし

お里に我に一もとゆかし梅の花

細代民部が息子が家にて
梅の木に猶やどり木や梅の花
里の子よ梅折残せ牛の鞭
　園女亭
暖簾の奥ものふかし北の梅
　乙州が東武行餞別
梅若菜まりこの宿のとろゝ汁
[illegible]
かぞへ来ぬやしき〳〵の梅柳
　去来が徳亡人のために...いひつかはす
蒟蒻のさしみもすこし梅の花
　何某彦八去年の二月身まかりしを
　一周忌の追善に父梅丸子が方へ申つかはす
梅が香に昔の一字あはれなり
[illegible]
葉にそむく椿や花のよそ心
旅烏古巣は梅に成にけり
[illegible]
　二月吉日とて是橘が剃髪して醫門に入を賀す
初午に狐の剃りし頭かな
　伊勢にて
神垣やおもひもかけずねはん像

貞享五年きさらきの末伊勢に詣つ
此御白洲の土を踏て今五たひに
及ひ侍りぬ猶ひとつのよはひの加はれる
千さとのほかけたふとくも有しとおほえ
光りを思ひ出すまゝに宮めくりしてかの西行
法師の涙をしたひ増賀の名利をいとひしを憶
しひて内外の神前にぬかつきまゐらす
扇ひろけて手向ん侍る
何の木の花とはしらす匂ひ哉
裸にはまた衣更着の嵐哉

嗒山旅店

何たらは家扇すり川銭衣哉

何たゝや柴級の多比花こもり

伊賀新大仏寺

丈六に陽炎高し石の上
枯芝やまた陽炎の一二寸

野州室の八嶋にて

糸遊に結ひつきたる煙哉
入かゝる日も糸遊の名残哉
百家や杉の木間にいろみ草
本草の情をやゝ生めくまのくさ
雪ふりうすき垣の芽鶴猶

二月堂

水取や氷の僧の沓の音

泊瀬にて
春の夜や籠人ゆかし堂の隅
春風やきせるくはへて船頭殿
奈良にて
春風や人おくりつる三笠山
笠寺奉納
笠寺やもらぬ窟も春の雨
よし野西行庵二句
凍とけて筆に汲ほす清水哉
春雨の木下につたふ清水哉
さる雨や蓮を伸す草の花
赤坂庵にて

不性さやかき起されし春の雨
春雨や蓑吹かへす川柳
春雨や蜂の巣つたふ屋根の漏
在原寺にて
しらぬ代に残る餞る嬌柳
猿猴に對して
ましらのこころ柳におその手くし
古川にこびて芽をふく柳哉
吹かぬに蝶の居るやまよひ柳
野杜國
笠の緒に柳こうめる旅もその哉
緑の手さはる柳のたよへかな

かくのごとき柳しげりたる樹一つ有
その由いはれ所のうた海にやうしなれ
さる法をも詠じけり柳尺それぞれ
千歳光きよらかなる中に涌出
せきをやめまけれハ
八九百年こゝに両律 樹されば
蝙蝠もおよばず古の花千本
世にきこゆるも千本念佛やすく
謹みゆくへしらずとやもしのや
寺號七季 七堂伽藍 八宗 横

訪山陰

榧の木に花そかりけりぬすまるれ

湖水眺望

かゝる紀の松のもとより眺めすれ

遙古人

高ならびの中に浮かぶる横雲の
山さくら花咲くもの先嫡の
異浄門書のむ書四王天の紫花も
られまへばしやまくへまくら手足喜
江海乗むの西照傍西のうち無をと
ひらひし花頂山より そのやさへの香
紅色枯らし鶴の林や思ひ出られ
てゆきを枕し

觀音に荒尺あらつき木の寺

も咲くや七ゝ都人る始まる
物外自悟
花に来て折れたるひとに友権
鶯の巣もえりすゝむの紫に紅
芋阮
花の雲降れる上野の法の声の
林すゝハ檜木とこの谷の老木の以ゝる
てらきのうハ世をしきて雪ハ深き
春ハ只生をお一桜の為のしひのお
千歳まハしよいひとつして語り
賀老の織をとりけぬ
きひしよや赤れはよりれあすかに

伊賀の上野宗阿ち新倉
その桜折しもそかりよるむなとく
咲みさす桜の中より新休とる
京清も花見の中すハ七十情
旅丸子の桜
さりしのるりかもひかす桜の家
新竹亭に縁をいれて旅の思ひ出と
うけきハ
花をかなよはしめ緑りや廿日を経
同亭より旅立けるに
咲ほる我とりて気にわかの瀬世
冥のとりに書付ける

芳野より桜見をしてかへりける日の本笠
龍門二句
龍門の花や上戸のみやけにせん
酒のみにかたらんかゝる瀧の花
桜狩きとくや日々に五里六里
芳野
花さかり山ハ日ころの朝ほらけ
しはらくハ花の上なる月夜かな
芳尾村にて
花のかけ謡に似たる旅ねかな
大和の国を行脚して葛城の麓をとほるに
よもの花ハ盛にして峯ハかすミわたりたる
曙のけしきいとゝ艶なるにかの神のみかたち
あしゝと人の口さかなく世にいひ傳へ侍れハ
猶見たし花に明ゆく神の顔
支考か東行餞別
此こゝろ推せよ花に五器一具
尾張の門人より濁酒一樽木曽の檜
諸菜一種おくりけるを人々くるまに
むれきし
飲あけて花いけにせん二升樽
春の夜ハ桜に明てしまひけり
芭蕉子桃桜二門人に其角嵐雪をたて
両の手に桃と桜や草の餅

示門人

まり訖とや人それ花をやめし

箱山の雲さし拵雲ら画し野の猿

夜もいやそまおとろく栞の花

任吟所

都の花みくろ左や花の雲

露浴ますて

風行の花と何ら出花の庵

鳥を似ぬ背を見きて紳さら

為かくのみ

しらやしゝれ寺の小紙山桜

花山

花の山二丁のぼれバ大悲閣

嵯峨より保津川の旅をなし初

もみぢさす舟出し　柳京

さくらをバなき翁守をめでもし

詠ぬ草のかけらよ

花を翁められとあらひの嵐の家

上腹のもみぢすくらき佐与し に人も暮

おきわき物の若小唄の調さらし幕

そのかたこその松影もこのみて

より名さみ桜ハぬ花見えらの客

古書や名み桜ゆの桧ひさそ

都よくハうみそへとのそく桜ちる

踈きしてものゝゑハ蝶ゆふべつゝのれ

山家

都の峯に嵐の雨に休らうか

まりみ雨うれしきさくら

歌よみの氣を妙ほし山櫻

二尺の岡をあみて

ちさふれ卿の花も海の尾

伽子亭

蛙衣のめらしさそし霧雨の花

伊賀ならい位の時ハ子のかみ奈良の

八重櫻の料子附ふれりしこ侍人侍れハ

一里そみな花もよの子孫この や

扇まく酒をかうけやおさくら

似合しや豆の粉めしに櫻がり

嵐雪喬木子亭

去年の松花や木深く庵造り

木のもとに汁も膾も佐くら哉

酒屋亭記

四方より花吹入て鳰の波

酒通のみちゆくハ花むく時

草枕やまともおもひしとき味よ

蕉手亭桜

春しやさらしさ能にもの花

花のち汁跡手かゝる丸うつし

上巳詣

雨そゝくて中に降るむかし山櫻

古郷こゝのみの国中にも三月の節を

まつて

まつ雨や二度まて見る花の節

けふの○と思ひ出すこともなし

草餅や花の後のうすき実付く

木白集に

そよけなさやうつゝの櫻麻

佛見西岸寺

来ぬ佛見ぬ佛の光をよ

行人は悟つて咲く○桃の花

尚白と浪華へ下る

只一夜桃に宿る木情の花

古学の桃に帯むすむをとも

舟あしもやすむ浦の桃

さるけむ桃の花やうやく涼み

も心すさりて夜もむかしのかれは

り須行る庵をおとれる人に譲りて

おぬは人に人妻を具しむすめ孫と

持る人に家を残は

草の戸も住かはる代ぞ雛の家

　重三

青柳に泥すこしつく汐干かな

おとろへや齒に喰あてし海苔の砂

先師

蠣よりハ海苔をハ老の売もせて

浅草千里か許にて

海苔汁の手際見せけり浅黄椀

あけぼのや白魚しろきこと一寸

常陸下向に江戸を出送りの人に

此海の手け白魚送てわかれ哉

坎子閑談

志ら魚や黒き目を明く法の網

よし野をさくら谷

飯貝や雨に泊りて田螺聞

古池や蛙飛こむ水の音

蛙子の聞てより鯰を停めけり

おもふより花やかみつまく猫の恋

田家

麦めしにやつるゝ恋か猫の妻

猫の恋やむとき閨の朧月

膳所へ行人に對して

獺の祭見て来よ瀬田のおく

山路来て何やらゆかしすみれ草

悼呂丸

当帰より哀は塚のすみれ草

よく見れば薺花咲く垣ねかな

圓角扇子讃をこのまれて

あらしもまたふきぬにおもひうれ

菩提山

山寺の山かしさ告よ啼鳥に帰り

持ものゝ梨の接種や山の夕き

茶店二句

流しいけて世のうけよ午睡さく女

茶そゝけても見たらぬ宿の夕日

陳菴の信宗波旅の起れのこゝろ

古泉只あられなくよ陳くのふ

茶わや彼方のつりの帰家や社

ふのあらきの帳りしゝぬひとりけ

ふ宿もさき体ふたつしけのあれ

ひとり草中の物ゝ哀しの声

ご静まし

父母の言まりすゝ老し涼くの声

世にこそきけハおそろしきの声

鵺なりて娘しく物に帰り　藍

雉子とあり何すもなき嵐の家

荻子画讃

もろこしの紙紙つむ花筋　蝶

物ゑみや白いぬ草もとまる　蝶

竹木亭

蝶の羽ぬれいく度こゆる塀の屋根

起よし参友ニきぬめぐる節季

画讃

旅山や虹となく結ひ渡し

為河

あらしとは山小家に瀧の柳

画讃

山吹や宇治の蜻蛉の何はうちも

山ふかや笑ふましき枝の形

大和の御の射丹波市とよや以ふ

家うちも名れ折うらう家の光

出ふく咲く隈様くるを

草挑さ高のるころや庵の記

草枕こゝを四谷とさらり紙草履

鉢入や一里おくとし小山伏

此節ニ守れる第舎の画讃

華さく上着紫やさしや紗能家

二条軒

藪椿門を華のさのえての影

遙訛尚舎

物の名を先とふ萩のわくの葉蔭

沖くまりに和哥の浦まて追付う

為翁

行春やうら傳し魚の目より海

田家にまちの覚を勞

入あひは隣もきこえし花のくれ
隣つゞき里それともかるの草
西湖水楼に
ゆくまことを江の人とまじはる

寿讃
まち遠き隣の梅を折手ゆく
自画自賛

東方の虎やとくしも牛の角
えりやかましくいはひし秋の雨
四方の虫暮をさへろもの汁の見れ
轡ひかえておきえてそれ流浮魚

上村の妻
花の酩酊の織をしいとれ精女

孤岩にみちびく行を送る
むく起す諸のきおけめらひの菊

埋葬和尚を悼
咲よかしれ折りに花のわすれ形
袖よりこぼす露の浮をあみ
まかくめの襟よりゆの つくし

梅説

まつり流れ落してあり 藝
姫館に粧して蛸くる筆の心勝手
まつしかれハ
君や残香や薬子るいなして 将
淡洗の香氏す佛頂禅師の小庵
をとふて
有さまみ来て 棚さのしさる底の梅

発句暑さの説
寛文延宝のころ手乗井
嘘や我け耳のすゝめる体じきれ
対をまつく可麦はむく尾 花
口すゝき油月秋比秋しまれ
戸の口よ音れ々のれ 郎しな
黒蛸釜をうつて杯々付くきれ
去けいふまうやけくきすゝ手 峰
子規 正月の松の花さかり
清く小すむ耳に年魚妹く 郎しな
岩清水し流る 海や汐とくき来
蒿蒲生へ打のいまし ゝ 鐺 譲

見すごく荊をつかむ篠すゝきの竹
芭蕉翁似よりや似よりの新
時も いかにも 御祝儀にむ世の流
五月の雨光陰楽の鍛冶いつまでぞ
さみだれに汲物きや月に魚
時鳥や耳をすまする梅の雨
五月雨も瀬ぶみみぬみだれ川
さみだれや能登阿けるまゝ太郎
きみしく桜や代望舂とし侍も升
こゝも三河むしさせ麦の穂へさき
樵の家や晩ぬ坐煙の安清　風
右和八仲の内　二句

秋や須大波旅や秋しる麦から
汗まやよし地嶋の夜公伏
冬ら須す尺とるや身もらぬ京ん
ゆふ顔の白く蝉の後架子秋蝿よりて
秋風生るおいときよつゝ十調して
野くられい
いなや前よふ布ええら蝉衣
雲の河勝左熊ま半月の鯉
美しき浅ひめゆふや在さしの
落柳よふらとめいしめへ気すみ
閑かさや 秋柾下さら玉菜
梢よくばよき落つゝ蝉のかく

小夜の中山にて
いのちなりわつかの笠の下すゝみ
其角の母追善
うの花も母なき宿そ冷しき
甲斐の郡内といふ所に至る途中
苦吟
馬ほくほく我を絵に見る夏野かな
貞享之秋旅中
ひと川秋をさしたる柳かな更衣
夏木立も日ひとつ川葉のひとつかな
素良まし

灌仏の日に生れあふ鹿の子哉
灌仏や皺手合する数珠の音
招提寺
若葉して御目の雫ぬくはゝや
日光山
あらたふと青葉若葉の日の光
裏見の滝
しはらくは滝にこもるや夏の始
郭公ひとつ木立や四月の比の精
甲斐山中 二句
山賊の頤閉る葎かな
行駒の麦に慰むやとり哉

青柳しや草餅の穂に出つる翁

遅桜門

いさゝかの穂麦喰ひむ草枕

五月十日武府をさして旅に赴く
人くり嶋中をしきりに来りて餞別の
句をのふ其のへし

麦の穂をたよりにつかむ別かれ

麦の穂や泪にそめて啼雲雀

悼大顛和尚

梅恋て卯の花拝む泪かな

其角の母五七日追善

卯の花も母なき宿そすさまじき

すのをやこしか椿の林の山こし

尾張より東武に下る時

牡丹蘂深くわけ出る蜂の名残かな

桃隣新宅自画自賛

寒からぬ露や牡丹の花の蜜

大坂にて

菊の香に一夜も旅寝ひとり川かな

山崎宗鑑屋しきにて近衛殿の宗鑑
かすかたを見れはかきつはたと遊ばしけるを
思ひ出て田ひむて心のやよ以ふ

まつりむすへし柿の葉む菊の香も

鳴海知足亭

一ふつくし我手洗首のかうしかう
帰峰
ちるいろき風をとりあつめ行
てられとや笠手にさけて夏羽織
大垣の趣を思　日光御代参勤さを
まふ千鹿経する家田や何葉の客
篠の露袴にかけし茂り哉
嵐山萩の花りや風のお節
次鹿
通一万千萩如篇きく木下雲
雲岸ち
木つゝきも庵はやふらす夏木立

幻住庵
先たのむ椎の木もあり夏木立
別旧友
二やうてそのれ和けん気の角
子規啼や黒戸の浜庇
橘やいつ川野中の時鳥
隣蓬に浦まの涼み　二句
江戸の海すゝ矣先けり郭公
ほとゝきす消行方や島ひとつ
素尺の瀧
時ならぬみの瀧の素掛て
みちのく一見の桑門同行二人那須

此上のそしるを思ひて殺生石見
むしろをかくほとにあるゝかれハ
先此両句をとゝめ侍る
落来るや高久の宿のほとゝきす
那須にて
野を横に馬牽むけよ郭公
時鳥声横たふや水の上
一声の江に横ふや杜宇
京にても京なつかしや時鳥
嵯峨にて
ほとゝきす大竹藪をもる月夜
時鳥鳴や五尺のあやめ草

さし笠書ける扇に
ほとゝきす笠や捨けむほとゝきす
仏生会にて
田や麦や中にも夏の時鳥
明ほのやまた朔日に杜宇
不卜一周忌琴風興行
時鳥鳴音や古き硯箱
おもしろきや しばし飛そいそかハし
木隠て茶摘も聞や郭公
烏賊売の声まきらはし時鳥
すまの浦にて入会を
諸河法やみちのくに草の匂ひ

菁柳舎

柳のもと菁ゝと志の小料理の百
花芝ゟやすらひて
とんぼうと標や雨後花くも里
白けしや対の茶の咲つる哉

鷺杜園

白きくしに羽もく蝶のかくみ紙

汶鷹

海士の息まり足らうやけしの花

鋤水亭

雨おし思ふまゝまで芋苗ひ

芦舟

田一枚植てたち去柳かな

奥州今の志ら川より出ニ句

為ての口のしっす川より満つも風の吉
早苗とも歩き乙まてなまり雨
みちのくの糸し世に出むし先関屋
の跡なつのしきまて汀を越えて今
此白川もこゝぬ奴を岩瀬の玉川
翠簾翠竹の芳風を折かの陽関は
いつ故人に逢ふべくし
風流のをしめや於くの田植唄
志のふの歌見ふの里との文字柳の名跡
とるる方二百とうりふる原の世在八菁女の

田の名に先ずる両に文字ありて稲山
草すみとし前に立てられてゐる
よしく今ハ名のミ切れる石の面ハいさゝか
朱にれハさる風情もなく人作をせず
今普覚寺の乃へし跡ハ
さまべしろ手見や世のしるしの小揃
尾張の旧文字ありす
此を旅千代のく山田の行御
荒田の亭
栄つけし旧の森や田植陸
倉見堂ハ宝殿森の字ある
其の緑を置きそる花 梁

本多信の旅思ひ出て大津よりまゐる
秋田の寺を見すきて
此たゞる田舎の月を見て 只 春
上林三入亭
蛍火や棹郎酔て見参れ
秋の二火をと本さの寺や花のやと
秋に城を行徒然ひとめし
家を居て故のちひさきを記る
まろけ松石の木さらひに見る
色に入る源氏の所まゝも
地にひやるる今ハ清水しの中に
笠をかぶりて人の世の葉ありまそり
芳しや

帖牛角かつらけらう浮ゆのし

　絵らる本草読てる時方

うれ人の称してもなく本草の魂

精のぬけるまも似よ本ちらの粉

　鼠茶の山家

豊たしみ下るの扉まとうまへとしもと

　清風亭

足ひもよかり風らこうのひとりの夜

竹のなや移しも雨れ絡のまさし

　小鏡晴てし

うまとうしや第しあり人の界

呼ひ路ひし涼川の花とそもしとく

まくらや竹の子数すとて峰

　木国亭竹睡々

晴すとし竹根う月みのとと笠

　紡信岩

古き人乃尺付ぬ花や静の梁

又らえむ小松の中山えの松道

うつりをし篁りの人を驚かしくむ

踊余えいましむきん能和色

やみの村や家をやおもしりてはやま

　志うつりに信有之文をつのえす使して

昇やうれ尚もとしの斜とそくしきの

　大洋游仙亭

此宿それと覚しらぬ庵の雨

實方川とよむ作者しらでしとて
作ら居士岡やうつ手かけ
まつ許す人のしるや竹谷清

武隈の松にて

桜より松は二木を三月越シ

みちのくの萩や詩経の鏡此耳まつく
俗家まとひにふくれさし五月雨古家
菰草ち尺る五日とや歌枕にのけて
あやめ一束持し来ける

同おなし

あやめ草足に結ん草鞋の緒

ちかよりて鐘打まもむ　[illegible]

病中自脉

髪生て容顔青し五月雨

さみだれずからぬものや瀬尾の橋

於武隈川の水源にて

五月雨の流降ぬれ

醫王寺にて

笈も太刀も五月にかざれ帋幟

藤中将さねかたのつかハ笠しまより一里
をそろ墨ゐといふ所にありときゝて
さみだれに路つきさてみちもいとあし
きかハよそながら見て通りぬ

望しやいかに五月のめでたく花
　井守るゝし
さみだれの降残してや光堂
　もがみ川 旨
五月雨をあつめてすゞしもがみ川
風の香も南に近し最上川
ゆきぞや河はぶひろうて五月雨
　佐渡の流罪
入梅晴のわたくし雨や雲ちぎれ
　落柿舎頼破
さみだれや色紙へぎたる壁の跡
五月雨やかいこ煩ふ桑の畑

　嵐川へ行する
きみまもる傍の深草を尺ではかり
さつき三十日の不二の無心おもしろきに
月ナつくるみや雑さし五月富士
五月の雨風あまりにはげしく大井川水
出水したれハとゞめられて島田に逗
留す御舟の体なる人の許に行て二句
笹八さし青柴あふて菊の汁
五月雨の空吹おとせ大井川
橘山や嵐しくるゝ夜の雨
　那須の光明寺にて
夏山に足駄を拝む首途かな

夏山や杉すゞしみ一里塚

夏山や残すく里を食時分

茂るちや蜻蛉が時ありす涼ほ

子珊亭ぬし

茂河荒や藪を小池の茶咲しき

重行亭ぬし

珍らしや山を出羽の初茄子

翁の往古ふ此地行脚のし大垣の旅店を訪

ひ行りしにかの薫志ろみさこのよひ

きん花れ家代のむかしみ句ひて

春の家ハ俳諧千とせの花の種

正盛之像

鐵肝石心伴人之情

なつかしき一つる流や楠の露

破て扇ん撰子咲る石は上

宮館ぬし

夏草やつきのとも∖嵩の話

殺生石にて

石の香や夏草赤く露暑し

寺涼や夏の夕のむかし舟ごゝろ

清風亭二句

行末を繕帆よれむ紅の色

須磨帰を伸して紅のちれ

己百亭

やとりきむ藜の枝にあられすれし
前栽のぬし粽むすひしを給ふ
ところ憐みて
もろき人にたとへむ毛なき蛙かな
株抜く人をさそうはむ露の花
うき秋をさそひしけふの人さへ
旅よりしの賊しし我をきかし
綿繁山にて
撞鐘もひくゝしし蝉の声
立石寺にて
さ川の中に岩にしし入るみの声
　　　　　　　　　芋常迅（迅）

やうて兀ぬ寺はき八尺しん婦の声
　蟬菊らしろ男の像
老の中をうしろ姿して山かけ
ふるおそてもすみそめの袖
ともかけ
團扇もて何の声人のうしろ向
　壽香亭にて
秋くるものみしこの秋織る屋ちかし
ひとの涼み来らむ涼みにあかり
みとこよひとのさい咲ぬ瓜もの
　宇田の李伸の涼へ文の去信に
ひるの涼み屋かちしもの床の山

冬のかや酥て良む寺畠の瓜
ゆふ画手千瓢むかて越ひろう
住る人の部手臨発て幸生者達
る古諺を訪て
瓜作る里のあ秋なとゆすみ
河邊松波ちりて古き長瓢千瓜杜
花もといけて下手学沼の清艶を玉
て花生まつ霞て雲とも撥雨ゑ足より
瓜の色志川くいのあるやうれ芳
岸梯あそのしの吉のよりて廻しさ
絵様果山の松の下納涼して長年の
難をとなくさむほと

山のけや谷を善りん瓜をうけ
花と安ると一度手瓜みさうらひ
行倍庵千里延る時
夕手も鈴まてつの手す瓜のうれ
初吉葉うめしまやうう香輪うやを守
吉束うお積まし
鈴なう手よくて既て涼し瓜の泥
桁骨解行ハ蘇ハすしそつ吉葉
ゝ笠よ新して
香手佩れ二つ手割し吉葉瓜
瓜の皮むいさ香や蓮基雅
幽黎亭うそし

衣の秋や扇おりて冷し袖

きりぎりす足をふむのも清水かな

岐阜山にて

蝶なや古井の清水先むすぶ

那須の温泉の神は夜子八幡を

遥しまつりて南神一丈あまりなり

湯を結ふちのひと同し石清水

結ふうちや遥ひとくしら河か

江戸 二句

月を見て物なしいやしや江戸の花

月のさかれと思ひの中も江戸の夜

明石秋伯

稲妻やをのこぬかしき夜の月

手をさしかへて明子さ月

松の秋やこゝろしめる白鷺の声

夜の月浦うら浦むかし恭坂や

晋の渕明をうらやむ

よるうつに昼や柄の菜やをのむしろ

秋寂まつ人の住居す野かな

山も流もうこく八やな雪き

井戸水楼

普の夜や冷のしろの浪の上

名月しかり鶴とかすのをたえ

傍らんと笑ひさいまさうれはれに

人しらぬ山の木の葉に席を敷け
露をはらけさ
又たらひなのしみ川の手道絵
とふるゝを通て已に漏れぬを惜ひとさ
かまくらしてやうに空しき釣舟かな
松皆主ちゝ寿千年の花しげる冬
家居を錦にして　二句
いろしらけくる庭や雪の峰
草の戸の手閉をあすまでや雨の鼻
枝ぬくて女手ひゝつめぬ草この首
きのふにいく川崩れて月の山
六月や峰千雲れくはゐし山

夜の月や朝は浮きてもはる　鯨
清瀬や浪手藪こむ青松葉
みる月そふく病やみの果ての月
かゝり引ぬ酒陰手ぬぐひ秋外
松風の落葉この色ならすし
石川丈山の像
風の渡る羽織は襟をつくろはず
書き
芥子さへ友とかみころす羽根外
小倉山学寂寥し
松松をたゝめてや風の葉る　苔
游力亭　二句

さくらみや風のうらへおちお柳子
汐やかに川さそふ雲の峰
蛤の口志めて居る暑さ哉
波浪にまつ新や稲ら夕すゞみ
風瀑錦お
わけ入れバ松の中山まことに先
まろう名もみちのくしるをしてみの衣
より古木ヶ方へ下つけり行くる
衣人の小袖もいつやむ月干
十八楼北
はなしや風にあびる紙に涼し
清風亭

涼しさを我宿にしてねまる也
四株もおのつかやみの雲のみね
羽黒山まし
ありがたや雪をかをらす南谷
すゞしさやほの三か月の羽黒山
文暁子むし山の像を時に於れい
南も佛筆み其心も涼しの樒
新庄風流亭
あの宿く宝居る柳哉
袖の浦の眺望
あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ
寺島彦介亭

見おろせば海に入るゝよしのみ川

象潟や雨に西施がねぶの花

汐越や鶴脛ぬれて海涼し

西行法師

きさかたの桜は波にうづもれて
花の上こぐあまのつり舟

花の上こぐとよみけむ古木の桜
も残りて蚶満寺の志るしに残りて
法師をしのぶ人もあれば涼しさに

夕晴や桜に涼む波の花

小鯛さす柳涼しや海士が軒

川中の根本すゞしくぬるみかな

四条の河原涼とて夕月夜の比より
有明過る比まで川中に床をならべて
夜すがら酒のみ物くひ遊ぶ女ハ帯の
結めいかめしく男ハ羽折長う着なし
て法師老人ともにまじハり桶屋鍛
冶屋の弟子子まで暇得顔に
うたひのゝしるさすがに都の気色なるべし

川風や薄柿着たる夕すゞみ

妙照寺邑田家納涼

飯あふぐかゝが馳走や夕すゞみ

雪芝亭

涼しさや直に野松の枝の形

野水新宅

涼されし枝国に見ゆる竹の雨

東武より上りて人々に対す

東海の毛膓をつらし露すみ

硯明亭

涼しさ綾手宮のしらゝ峰嫁の竹

ふりくさしまた黄ろ上秋能の錦

大津木節亭まえし

秋なれやて湖のよるや四十年

春秋

笈原停出損

みえつもれあましの行とされ

長貞亭

海八そ様さ先輝かる五月雨

松島

鳥しや千く年ゝおそ夜の浪

松しげやあきを衣君のあとを月

野明亭

清流のさこゝみよきとて心た

芳心の村

萩八ち秋千里一風村路緑花

秋虫類　松虫ハ鈴虫よりたのしきを
なきはじめの句を見られハ
きみされて宿かねけり旅すゞき
李青く竹堂　碧く石河にあし
歳人に信州まで及ぶなかしと
此ゝやしまの春もうき鶏舟如
竟晩るまし
汗の手拭ふもうらむ紅老雲

発句秋之部
寛文延宝天和年中
猫あるの猫は見しかりきりの秋
秋来るゝ耳を驚く枕の風
秋来ぬと妻恋ひ汗や簾の波
来る雲ものうきものかなし一の川
月弓や蟋蟀の一葉男七夕
七夕は何とぬらすや雨中天
名所八体の句　二句
星合の中川や龍田むかし鷹川
八朔や下の村になきに文鱗斗
憶老杜

蕉風を慕ひて嘗ハ秋龍するハ終りまて
三ヶ月や翁の碑の夕けしき　雨
月をこゝに見るも此地をはしめとなし
まつとはしらくむかしをしのふれと人もなし
またなきなりしとて
然てすみし月後京世　奈良坂等
尺度を八様経ハ尺書ハ順テの秋
六所三宝情の二人千蘆蕉庵を訪れて
古郷の安房を出
はる千里庵に出抄り也や秋の経
角髪やおくをと出船のすゝしい赴
画賛

稲妻や千本のまて美枝ぬくし
蝸牛のをとを見と呼秋の風
粉東峰
松あれや恵方え以きまるへしく待出
南さく萩や露霜豊乳花のこゝろ
よくなきの川一筋をけ虫の旅宿して
月了きゝへこゝろへいつゝをひのやと
桂男すまれあまりける庵の月
世の色もしれや名残三日の月
新ハ天の下てるひあまの月の影
実や月可は千里の通り所
きつくや豆腐むら夜さくさすわ楽

秋のきのや戸の口やとゝのり　散
こ俵もまとし水生木やまみち　鮒
武蔵や茶附仁和をと先とし　政咲
欲先よすとゆり
名月のむらや五十一ヶ　湊
寺しと名月の松や葉印　山
派るや江戸まれかれ和山の　月
木を代きまとはし口尺をやくふの　月
旨　蘭　草　菊　宜　止
職主や肩手植行うく　衣
武蔵野や一寸伴とれ森の声
萩の花しや秋風のはらつし

文ふしぬいろはきるしく犬中　糺
後家の秋物のゆかれをとゞめくり
色の瀬えきらでいふし秋のくれ
雨の日や世間の秋を　堺町

茅舎の感

芭蕉野分して盥に雨を聞夜哉
よくぞよきはりの尺る笠　下すれ
ひれかうく牝鹿もよふや牡鹿島
秋くれ霜に虫ハ月下の葉を穿
夏桑すりて寡速も行や秋の暮
秋のくれ男ハ洩ぬ者の哀れハて
花木様　猿　意ぬかまし　の菊

唐黍や軒端の荻の取ちかへ

重陽

さゝつまみにゆく菊や朽木堂
近江路を通り侍りし比は膳所の里
にて旅人よりすまの手上のきぬたと
稲こき
刈まじる跡の穂の標のひきこぼれ

貞享元禄年中
鳴海泊
初秋や海も青田の一みどり

こつ秋や行みさへのかへ比帳の縁
直江津にて
文月や六日も常の夜には似ず
出雲崎にて
荒海や佐渡に横たふ天の川
合歓の木の葉ごしもいとへ星のかげ
東武の母七十あまり七とせの秋七月
七日に寿をまうけて茶菓の七種をそなへて
題とすることありその七人の詩歌
をあつめし又七男女の歌をそへて
七株の萩の千本や星の秋
何のしたひ代をそれ随身して四ツ時赴

く人介
七夕やさゝに現はる係 桃
吊雨星
言水にはしや藍崩や岩の上
坤章李まて
七夕や秋をさだむるはじめの夜
當麻寺にて
僧朝顔いく死かへる法の松
朝顔の花にしづかに[illegible]坂の錦り
嵐雪ゟ画に讃をのそまれ
朝顔はへたのかくさへあはれなり
更科紀行
草も[illegible]しらぬ[illegible]
閉関
あさがほや昼は錠おろす門の垣
朝顔や是も又我友ならず
和女角蓼蛍句
朝顔に我は飯くふをとこ哉
[illegible]の[illegible]時[illegible]の小枝にお
[illegible]みて
物書て扇ひきさく[illegible]れ哉
[illegible]にて
秋涼し手毎にむけや瓜茄子
粟津の庵にて[illegible]の[illegible]

ひやしと聲をふるへて蛍哉
寄李下
稲妻をとしとるや闇の紙帳哉
宿数盤
ほのみえて稲妻そやかの川たよりかな
夜秋識の沙さまにくるら將大将の墓
とゐやいとしきうくこて
いれつきて怯ぬ人のたのしさよ
稲妻や闇の方行く五位の声
右百之句ハ翁の骸骨ともに篇数をか
さゝく餞すらんを画て菲基の埋ミ
こけしうまるに生若の花をふられたるとは 云

此暮にすまふしあやかの初法を
枕としてほ秋十鬼ふつてをわなるゝ都の
も只此生若を高さうしものも
四ぶまや又への雲ゝすゝきの穂
よし此臣行虎えて
あかとくし試手添安すしうちや
画讃
あけの首雜をうるれ松の露
首良を前ある
ゑみしうや書付けさむ笠の露
二見の浦にて
砂うと拾ふやくほまり石の露

此論ハ壺中蓬莱方丈八仙の地なり
その竹より古峰を排して蒼天をお
さえ日月の府に玄門をひらくとも
いふべきなれ初ましりて美景をまもす
詩人も句を省きます才士文人もこれを味
画工も筆を捨てけり藐姑射
此巧の仙人ゆへて其絵をよくなしむ
名画をよくなす雨の
雲雪は皆時　百景を画しけり
霧雨ハ不二を見ぬ日ぞおもしろき
秋海棠西瓜の色に咲きけり
玉川の水におぼれてきえし

ひよろひよろと猶露けしや女郎花
くすし何の縁
むら雨を背中にかけて草枕
山上の吟
花さきし木槿ハ子等か誰れくり
高田醫師細川春庵亭
薬欄にいづれの花を草枕
加賀国入
早稲の香や分け入右は有磯海
小松といふ所にて
しほらしき名や小松吹萩すゝき
萩原や一夜はやどせ山の犬

欽小亭
ぬれてゆく人もをかしや雨の萩
種の濱
浪の間や小貝にまじる萩の塵
いろの濱
小萩ちれますほの小かひ小さかつき
画讃
しら露もこぼさぬ萩のうねりかな
ひとつ家に遊女も寝たり萩と月
萩其言伸子の庭なるは作りしを
見て
風色やしどろに植し庭の萩

敦賀なる宗院
門に入ハ蘇鉄に蘭のにほひかな
悦堂和尚の隠室にての作て
萩を挿て 茶性 蕣はやとり外
茶店にて
蕣の花や蝶のつばさにとまりけり
遊女の画讃
枝ぶりも日ごとにかはる芙蓉かな
きのふ雨の花をも芙蓉の下葉紅
草いろいろおのおの花の手柄かな
此寺は庭一盃のばせを哉
秋草萃

花ほそし角力取草の花乃露

伊勢の斗従にしたひて詠まさ

若葉ハまさに花とも見えける山路かな

三ヶ月の晴れそめほのめかし若葉の末

知足の弟金右衛門が新宅を賀す

よき家や雀よろこぶ背戸の粟

初秋中の一日武蔵を出て素翁の題をはち

名のほどや秋をいらしの鉈の菊

かかへ玉をとさる

魚坂ゆうや川の玉霰

多度山

玉あられ多度あふ植椿のむかし哉

尼寿貞が身まかりけるとききて

数ならぬ身とな思ひそ玉祭り

蓮池やをもつて貴なる玉まつり

甲戌の秋大津に侍りしをこのみせ

江戸より消息きこゆれば旧里へ帰る

舎をいとなむとて

家はみな杖に白髪の墓参り

骸骨の讃

夕風や盆燈籠を撤さ手従

むつしさけ秩父屋さくらの取

許六が画に

晴角力川を上るか染の食

庵主のけんとし句々の集をもるゝ逸
一知の後手
秋のいろぬかの味噌壺もなかりけり
志川ちきや続きて聖のきこえしに
名き月や宵やみさしし法の声
床にゐていさよひを入やきこえしに
新月しき唱すしむきまつりし
太田の神社にて
むざんやなかぶとの下のきりぎりす
白髪ぬく枕の下やきりぎりす
さびしさや釘にかけたる蓑
草の戸に住てひさし秋の風の迎し

けふよりや友だちの方へつかはしける
みの虫の音を聞に来よ草の庵
蜻蛉や取つきかねし草の上
故郷ふまへて秋ふる業法外
見の名もとしも四十雀
田中の法蔵寺にて
荻の声や不縁のしの鴫の声
田家
かりかけし田面の鶴や里の秋
稲の家ちる稲の穂や鶴ぬけし
田家酒家
桐の木に鶉鳴なる塀の内

聲の間もはなや音なし峠　鶉

稲すゝめ茶の木はたけや逃所

青くてもあるべきものを　蕃椒

かくさぬぞ宿は菜汁に唐からし

大風のあしたも赤し唐からし

木曽塚の旧草に在りて敲戸の人に対す

草の戸をしれや穂蓼に唐からし

梅丸軒にて

蒼柳しなふても寒き鐘をや

全昌寺にて

庭掃て出はや精舎ちる柳

画讃

稲妻や顔のところが薄の穂

堅田にて二句

病雁の夜寒に落て旅ねかな

海士の家は小海老にまじるいとゞ哉

同手すゝ雲やさはしのころも

奈良にて

ひいと啼尻声悲し夜の鹿

いでゝなく旅箱捨つむ一葉の露

倶利伽羅や三段起てもおもし

枚の竹葉斜とい草庵を尋て

粟稗にまづしくもあらず草の庵

故人に逢て

冬瓜や互にかはる顔の形

雨行者

芋洗ふ女西行ならば歌よまむ

山中十景高瀬漁火

かゞり火に鰍や浪の下むせび

嵐雪か四谷に渡る時

旅鳥二百十日も船支度

みの虫もしらず吹まくのわき哉

吹流されぬ涼下の暴風哉

三日月やをやみもなく降る笠揃

小松の中山にて

宵月に霜越の月寒し茶屋の鐘

那谷山にて

三十日月なし千とせの杉を抱嵐

天の原新やまさし行秋も宵月秋

やまおし人を体する月見かれ

いさよひの月に旅寝て舟の中で

一夜を語らひし嶮の雲ゐ違ふかしら

きさしかりて

めでたくや二十七夜も三日月

川舟やよき茶よき酒能月夜

雨晴のとく人に見しらせて月見れ

古将監か古実を録して

月やその鉢の木の日の下面

於鹿島根本寺にて二句

月はやし梢は雨を持ながら

寺に寝てまこと顔なる月見哉

田家にて二句

賤の子や稲すりかけて月を見る

いもの葉や月待里の焼畑

大曽根成就院にて物語時

何事の見たてにも似ず三かの月

あの中に蒔絵書たし宿の月

姨捨山にて

俤や姨ひとりなく月の友

いざよひもまだ更科の郡かな

善光寺にて

月影や四門四宗も只ひとつ

仲秋の月は更科の里姨捨山に慰かね

うつろふなほあはれさの目もはなれねば

ありて長月十三夜になりぬ

木曽の痩もまだなほらぬに後の月

浅水の橋をわたる俗にあさむつといへど

清少納言の橋はとある一条あさむつの

とかける所とて

あさむつや月見の旅の明ばなれ

月見せよ玉江の芦を刈ぬ先

湯の尾峠にて

月に名をつゝみかねてやいもの神

燧山

義仲の寝覚の山か月かなし

気比の明神

月清し遊行のもてる砂の上

敦賀夜泊

名月や北国日和定めなき

浜

月のみか雨に相撲もなかりけり

仲秋の夜つるかの津に泊り如何にける物
うかりし此海に沈みて侍る鐘
を国の守の海士を入て尋させ給へと龍
頭下さまに落て引揚べきたよりもなしと
聞て

月いつく鐘は沈る海の底

木因亭にて

隠れ家や月と菊とに田三反

斜嶺亭

戸を開けは西に山あり伊吹といふ花
にもよらす雪にもよらす只是孤山
の徳あり

其まゝに月もたのまし伊吹山

伊勢の国又玄が宅にとゝめられ侍る頃
其妻の男の心にひとしく物毎にまめやか

尽しかは旅の心を安くし侍りぬ彼日向
守の妻髪を切て席をまうけられし
心はせ今更申出て
月さひよ明智か妻の咄せ　翁
悼亡流て宗法師
秀雲を羽黒すえを法の月
是や月それからくも瀬田の月
無題
夜うけて明月男も浮み氣
打出の濵にて
いさよひや海老ゆるほとの宵の闇
既望賦二句
湖明て月さし入よ浮御堂
安しともいさよふ月の雲
正秀亭初会
月代や膝に手を置宵のやと
古寺翫月
月見する座に美しき㒵もなし
月見の雑
米くれし友をこよひの月の客
義仲寺にて
三井寺の門たゝかはやけふの月
名月や湖のむかふに七小町
名月や兒たちならふ堂の縁

名月や朝経かゝむ壱千湾
名月や象を筆架のこけむし
名月やつての茶たる門流坊
清丸

あはれなくて露や宿の月
紫の雲ときけハ心や　おりなれとも
むかしのもき物そなたの此寄ハ
東山に住る僧をおとく西行上人此
よみをりかし山家集のきこれより
此の事はよりやとそのもしくさある
草庵の坊につのりしける
紫の戸に月やそこの孫池坊

石山に消る也
松樹は志の子ハ月は名残の菊
旅宿の長秋
てぬれ起ても月の七ツの家
深川
名月や門にさし来る潮かしら
松ハ松風の情を削て住ひれ
曽良試けり物数寄を後に名
月のよそほひを芭蕉庵にまとを
哉
そを縄数をと植しのけ芳庵の月
深川の末五本松といふ所に舟をさして

川上と此川下や月の友
いさよひはわつかに闇のはしめかな
嵐蘭初七日謁墓
見しやその七日は墓の三日の月
東順傳
入月の跡は机の四隅哉
岱水亭にて
影待や菊の香のする豆腐串
伊賀の山中にて　二句
名月の花かと見へて綿畠
名月に麓の霧や田の曇
蓑虫庵にて
今宵誰よし野の月も十六里
住吉の市にて
升買て分別替る月見かな
畦止亭題月下送児
月すむや狐こはかる児の供
其柳亭にて
秋もはやはらつく雨に月の形
名月や池をめくりて夜もすから
山寺し仏の庭や秀の月
あの中に蒔絵書たし宿の月
かけはしや先思ひいつ駒むかへ
桟やいのちをからむ蔦かつら

芳野花泊

桜まくら寐よとよや昔りつ月
春の夜すか斗てけく桜かれ
花ひらハ花の小袖をときぬらん
千里の旧里まし
鎌らや昼も碍も行の花く

庵の牧寿まし
花植て休ほ五本のあし跡
秋の雲のゆく空の葉もあのうかう
草の葉も茂こしめする紅葉かな
思ひ出ハ家も紅葉もかしもまみちかな
よし飛まし

法の庭手を合て声の御ハ伺と思ふ小草
母の白髪とし柿のみかき
あきとらハ消ん流てゆ川の秋の雲
初茸やまさり数へ飛ぬ秋のつ西
松たけやしらぬ木の葉の風もろ付
松茸やかのれとハ松の影
茸がりやあふなれるのう夕時雨
始水の楼
露の底ろ本の家の家捨てや
木の下の椽ら老母の人おもたれ
李内吉本の二人乎
茹蘿と柿とうれしき草の陀

氏野可翠亭

里ふりて柿の木持ぬ家もなし

志ふ柿や一口ハ喰ふ猿のつら

望月素湫亭

祖父と親孫子は庭や柿みのる

椎や侍都の札白子の席さもし

何喰て小家ハ秋の梅このけ

秋さ隣家障子に只や菊の香

草莽の雨

起ふる菊好のうしろ手はしと

左柳亭もし

さやくさけれまよせつのし家の菊

蓬池のまま菊をもつすきのふ

能山の客をひきりかえ千海れ

鉛れるをきすめて狂喰なきかれ

よふすれ枡本ふ明年後のすくやう

あしきてと成

ゆきよひのいつ徒のら野は張菊

山中や湯泉もし

山中や菊そたまらぬ湯の自ひ

ぬ行亭もし

痩あてのしるうあな菊のつみれふ

菊の客なるをひろくハぬくのこれ

田たか千尾る

稲こきの姥もめでたし菊の花

堅田の何かし木院醫師の兄の亭に招かれしにこゝろ深きもてなし酒をもてなされける菊葉八珍の中草花なりとすほど芳しき香ハ

蝶も来て酢をすふ菊の鱠かな

九月九日乙州が一樽を携来りけれハ

草の戸や日暮てくれし菊の酒

尺とれのはれやのちの後の菊

八丁堀にて

菊の花咲や石屋の石の間

大門通りをすぐるに

菊畠や古物店の背戸の垣

国女亭にて

起きかへり月にこたへる菊の花

奈良にて二句

菊の香や奈良には古き仏達

菊の香や奈良は幾代の男ぶり

又この吟味にて

菊の香にくらがり登る節句かな

生玉辺より日を暮して

菊に出て奈良と難波は宵月夜

菊花の讃

折々ハ酢になる菊のさかな哉

江上の破屋をもちまくて　二句
野さらしを心に風のしむ身かな
秋十とせ却て江戸をさす古郷
慄枝子
猿を聞人捨子に秋の風いかに
義朝の心に似たり秋の風
秋風や薮も畠も不破の関
身にしみて大根からし秋の風
一笑追善
塚もうごけ我泣声は秋の風
途中
赤〳〵と日はつれなくも秋の風

牛部屋に蚊の声暗し秋の風
那谷観音にて
石山の石より白し秋の風
贈桃夭号
桃の木の其葉ちらすな秋の風
中村をさりて
秋の風伊勢の墓原猶凄し
秋かぜの吹とも青し栗の毬
座右の銘
ものいへば唇さむし秋の風
暮秋の季しきをとし
秋風や桐に動いて蔦の霜

伊勢紀行の跋

西東あはれさひとしき秋の風

悼松倉嵐蘭

秋風に折れて悲しき桑の杖

野水が旅行を送る

見送りのうしろや寂し秋の風

也翠亭題夜寒

煮麺の下たきたつる夜寒かな

度会神前

此松の実生えせし代や神の秋

蔔茅

ゑうまし おそろし果は木葉の秋

さゝてきく秋よ膝ちよひとり隠

種の浜にて

さびしさや須磨にかちたる浜の秋

西行庵にて

旅痛や窓のつゝふ秋の山

小名木沢桐奚興行

秋に添て行はや末は小松川

旅懐

此秋は何て年よる雲に鳥

車庸亭二句

妹の夜を打崩したる噺かな

ゆかしは松おまへよきみて新酒

さゝゝ人し肴衛ハいやしく朝起ハ
せはし

神もしらぬ秋の新宿や亭主ぶり

木因亭にて

死もせぬ旅寝の果よ秋のくれ

いく秋のみせかりて明星がかれ

深川の庵

桃印の辰もさびし秋の経

枯枝に鴉のとまりたる秋のくれ

雲竹の像

こちらむけ我もさびしき秋の暮

所思

此道やゆく人なしに秋のくれ

行秋や身に引まとふ三布蒲団

蛤のふたみにわかれゆく秋ぞ

内宮ハ事をさまりて外宮の遷宮を
をがみ侍りて

たふとさにみなおしあひぬ御遷宮

ゆく秋のなほたのもしや青蜜柑

芝柏亭にて

秋深き隣ハ何をする人ぞ

清水の茶店に憩ひて

松風の軒をめぐりて秋暮ぬ

行秋や手をひろげたる栗のいが

哀誄

悼仙風

手向ケ花ハ萎まず仙ならしや
豪海長老某の名をし言ふ
侍らしき葬をき
何ゆへに秋の夜さへも花ならん
武蔵野の月の名残や松島の縁
みの程の名の哀なる秋も寒ぬ
　　よし野西行庵

現住ふ留為ハむかし菩清の
一草庵の席上饗食庭をおしてきしみさびしき味をますなれ
顔の銘
米のあふ附て新月をみるべし
みの声さけ床辛も入やすからん
等栽ま君ゆびく
名月の又宿ぞつん松島をも
今米をとましひて
世の中を梅静てろこの草の庵
蝕ろは新たな哥の詠し舟
伏の砂や茅の中ゆく風の枕と

嵐雪手おくる

きひしさをつくられぬる桐一葉

名月や酒にも侘しき更ひとり

秋のくれ宿は亭主の中ノ桂

此比八井伊家の邸に訪ふを君ゑいし時

侍六も出し家に訪ふ侘て別れの詞

を待うちの作ありとて年中桂より

まの八今は桂井侍家に残りしとぞ

発句各々説

寛文元年て和手竹

月の鏡小春やうやく月の正月

風ふきやさの道くも村時雨

戸田権太夫亭

一しらけ花や降て小石川

とりて時雨傘をさし提て侍僧

大吹竹をや志く帰て小豆食

むら時雨てれ小町の大家下

不の縫てゐ志ほめるやみとめり

深川夕桜の遊

梅の香浪をしおりて猪牙の船

ゆふしほやきのふハ見てふくとけ
竟山社釜雪おれ峰し散りし

茅舎買水

氷苦く偃鼠か咽をうるほせり
小野炭や手習ふ人の灰さくり
埋火しても消ゆて涙烹る聲

龍安寺にて

山寒し家にかゝれん宵まよひ
白炭やかの浦島か老の箱

張笠の説

世にふるもさらに宗祇のやどり哉
霙のわれて咲ハ年々の笠作

浪の花と雪もや水にかへり花
ふきの雪 相坂を関の雲にのれ

耕月亭にて

雪をまつ上戸は顔やいなひかり
時雨をやもどかしがりて松の雪
ゆきましる帷子雪ハ小紋かな
足袋をと何といふとも名残の雪

手おもふるゝ人の許にて

忘れずや亡ハさとの仏月の雪の床
笠の緒や咽ふき出す不二の雪
雪見ハ南の枝や来させる

みちのく名所の内猫山

山ぞ猫餓うちいるや雪のひかり
白雪の日や渡海の羽抜手ふくさ箱
杉見八幸し呉天に雪を戴きあふぎ
雪の竹笛作るく也花咲きむ
ゆきの鉢ひらう千鮭をかみえうら

名所八体の内

松島や雪も青くやの名にくらう
千代をふる天のてん清るあらき海
ここれ芽業飯千つまむ年の暮
此うち挑なうくし年の暖なれん
乾鮭や何かし庭先も白人
あらかなくなくとあらく年の暮

一休ら志気一つくさむとしのいお

貞享元禄年中

元禄辛酉初冬九日素堂菊園に遊
重陽の宴を神無月のけふにまうけ
侍ることは八世須八蕉翁みな集りをやすれ
菊もいろく寸法重陽ちらる心をより
且八辰重陽のためしなきもなるを
移秋菊をし祝ーさ人しとすゝあう
れうるすあゆぬ

菊の香や庭に切れたる履の底

桐葉のめし志ぐるゝ比ハちはく
とよりあきをし侍りに
此海に草鞋すてん笠時雨
笠の徐うつて時雨かひく
笠もなき我をしぐるゝかこは何と
草枕犬もしぐるゝか夜の声
時雨ゆくや舟の帆隠す取付て
鏡に声て時雨さ生屋かな
人の語へをしめてゆかさく
初時雨初の字を我時雨かな
ちやこふさへといふ浮油のむく
らのやかふられたくとも袖を

うたしきてあとま里はをやた火
旅人と我名よばれん初時雨
一尾根は志ぐるゝ雲か不二の雪
伊賀山中
初時雨猿も小みのをほしげ也
旧里の道すがら
志ぐるゝや田の新株の黒むほど
美濃竹戸か許に宿りて
作り木の庭をいさめる時雨かな
島田驛塚本か家にて
宿かりて名を名のらする時雨かな
馬方はしらじ時雨の大井川

好六亭ぬし
しかくの人も年よる枕そつみ白
新精のむ紛てゝやきし夜は
山端く井出の蛙のしるし夜の乱
芋阮
人しを時雨ら冷れ夜ごくとも
支𣴎亭ぬし
口切や堺の庭そあかりのしき
蝸一つ年や右皆老ゆく蟹の露
熊田ぬし
志のふきく枯て餅のふやすき乱
雪の後暮ともひさ

花のれ枯てしおもしろ浮すすきのゑ
荷終や袖手ちきれぬ菊の花の茎
杉の霜了篝の枯野をうけせる
骨堂や砂と尺まり蝶の加り
大根引というを花
藪蔭子小坊主の大根引
消息
口上 さる座しらう出大根
言角子旅館のて菜根を煮して
詠み丈夫て清候ます
まのうかみ大根一つのしき喇つか
篇のうち大根の御更て候し

さすて長きの雨にならぬは残念さ
とまりしのはつしにもえたる優墨
ままては人をまくれるれ手なれてゐる
むかし狂歌は才士のものとなりたりし
ことを不図思ひ出して作る
狂句　本のうしみ奈竹の葉例なれ
竹の画讃
木のうしや作りからうかと嬉しき
冬枯や春まで一色にて風の形よ
冬のうれの残りも節ひとつなきこの紙
木からしや彩絵いつれも人の良
耕雪亭呂雄

本枯りに句ひやつけしてて花
三河新城の家士菅沼楼主の宅
にきて此木のうしや冬住ひ
鳳来寺に参詣して
風ひ出しかとおふ　松　宮　子角
角段の楼段を見る
雲人よ春夏をちらしを前葉川
角主の山かれぬる飾りの前葉
大通院主さを何は芽茗をゆのごと
久しき家にかみしえ事を知り
しに残り千年をたかくれ初め一
秋の香りきしぬるふ八十や一句えこ五

あらぬとはきとゆかく
廿からちえゝや枯木の枝の長
大津をとる
三
尺の山もゆるし秋木葉すれ
月の風きさこしへる灯照するに旅思
をとすまして
そよかる浪や浮く　哉もみち
当寺は西国千体をとしつまれさまう
既千百年るおよふとの御堂奉
加の縁に白竹樹ひてみるに古不老ひう
とおもひれ木之物つてて珠購千
覚ゆるれハ

百年は年しきを庭の落葉かな
志ひす俳師度千縛まさかり
振りつその月はそれしたひす俳
菊額頭をう並しうつ御命講
消息
御命講や御の中うれ涙玉井
対芋蕣
名庭や月もいとまる虫の浮
名気文よりきそこくむは桂
金屏の松は古ひやる気く
碧酒堂
御名の碑を見ひねざる国ある　一匹芦

百の蛸のくさみをおさふれば生ながら宿も
ふところにてなされ
なまへ清や田畑のふところ気あり

樗七評す

旧里を去りて志あつく田畑に力をつくす
らふ人あり家僕何すれ木の...
力を告しめ心をいさめ久しく千穣
奴阿段が功をほめられし陶侃が故奴
をさふ諌や花ハ廿人をともなふれ
物ハちまちまあるは下位に在すも
上智の人はうとじて能く識所
たゆむことなかれ何事も千歳を

なまじへのふれ
先祖々梅をもて後の名を守
子川亭に遊ひて
新しき伊吹をも見てや名乗

防川亭にて

真を探る梅千萩見る軒端かな
趙日梅人亭主庵の閑を思ひやりて
白仙や白き様子みまもつり
三河にて白雪といふものゝ子二人桃
先桃後の名をゆづりて
其白ハ桃より来りし白仙也
さし萩の花の友や白葉草

此里をはひ出て八幡宮の院の御
門の松をも見すてゝ清ら
美しき里人のかつら絵まとひて
臥文にそめさせしるしに候ふ
ともいへるにぞ折に候ふまゝに
梅花を紀念に啓らるゝ里
おもふきの花入れて梅花とせ
菊や粉螺のつる白のそる
　池下の茶店にて
松葉を焚きて手拭ほすやまとのれ
　吉田の驛にて
ましけれと二人よりねもしたのもしき

孫子や春にて入りかはりさき
三河の国赤坂に泊る夜の夜更けて候
此あたりに一時のかたに一松かけて
松風ひらく新しく旅の宿りて
　季吟の妻の悼
うつきふりて藤園や雲をお松の葉の
　元起和尚より酒を贈られけるに
なかなか
　乞食くへ僧入りてのみけるかな此
　仏化の父の追善
袖のいろはよしとれて下されし涼風
涼しく鯛の園の菓子をさかなにして魚の店

葱白く洗ひたてたるさむさかな
熱田にて
海くれて鴨のこゑほのかに白し
桑名古益亭にて
冬牡丹千鳥よ雪のほとゝきす
一ひらのえびのてまとふし川千鳥
秋きのふハ　松風の里　呼続き
夜ありての笠さまよ　雪の降日
星崎の闇を見よとや啼千鳥
杜國を訪ひけるをすまの
鷹ひとつ見付てうれしいらこ崎
驚手はしみ見えめくし鴨の足

杜國か不幸を伊良古崎に尋て鷹の
声を折ふし聞て
夢よりもうつゝの鷹そたのもしき
あまつ縄手にて
すくみゆくや馬上に氷る影法師
さむの川に寝る川に寝る海嵐の
花家地々ちやうあ人の心をいふ山家集
社頭にて
一ともとくれさぬ菊の花　哥の曲
若焼やすゝき梅の国井の梢　花
瓶くれる枝の花は衣花
十二月九日秋芳亭の梅ひ

初雪やさいはひ庵にまかりある

曽良何某は此あたり近くかりに居をしめて朝な夕なにとひつとはる我くひ物いとなむ時は柴折くぶるたすけとなり茶を煮る夜は来りて軒をたゝく性隠閑をこのむ人にて交金をたつ
おりしもこのまゝとし何某雪に
訪給て

君火をたけよき物見せむ雪丸げ

初霜や菊冷え初むる腰の綿

抱月亭にて

市人にいで是売む雪の笠

ひころにくき烏も雪の朝哉

杜国亭にて中将しき人のもとにて
取はやくるとや

雪と雪こよひ師走の名月か

箱根こす人もあるらし今朝の雪

ためつけて雪見にまかる紙衣哉

旅人を見る

馬をさへ詠る雪の朝哉

深川八貧の中

米買に雪の袋や投頭巾

寒山自画賛

庭掃て雪をわするゝ箒哉

閑居箴

海の気はいとゞ縮まるよその雪

　呼海醒葉言亭にて

京やとしはまたせや雪の雪

　熱田浄瀧和尚

鹿真に讀ても清し雪の木

　去年の僕が句を思ひ出て越人今歸る

二人見し雪はことしも降けるの

　信濃羈旅

雪ちるや穂屋の芒の刈残し

いさらは雪見に轉ふ所まて

　山井子手紙と送ひて

雪の日ハ兎の皮の髭つくれ

　元禄己巳奈良大佛再興

はつ雪やいつ大佛の柱立

初雪や聖小僧の笈のいろ

此の句音の詩人とふんさきさる

程ぞありし後志賀の里に庵を結び

ありて大津松本何がしが宅にて

老尼の許に云ひ遣るれと縒り

出る時はゆきて扨もしるされハ

少将の尼のはなしや志賀の雪

　湖水眺望

比良三上雪さしわたせ鷺の橋

大雪や淋しくひとり住藪の家

三秋を経て深川の草庵に帰りけれハ
旧友門人日ゝにむらがり来ていかにと
問ハこたへ侍る

ともかくもならでや雪の枯尾花

日比みくむ雅も雪の河しられ

小町の画讃

たふとさや雪降ぬ日もみのと笠

草庵ニ土芳訪

木枕ぬ阿ふしぬるふやよるの雪

深川大橋半かゝりける時

初雪やかけかゝりたる橋の上

初雪や水仙の葉のたわむまで

竹の画讃

あらしみてハ雪中竹の夢きか
淋しあつしくく汁吉の雪
雪月花の淋しぬ武江ニ読る
おもしろ神も旅の月の手すられ

深川大橋成就し時

ありかたやいたゝいてふむ橋の霜

秋すのゝや竹将くするえさのしも
かくしと打の淋し竹の霜

去年四友子を送りて随余かえてやのる
霰を謡て 鴬 蹴ひくかへて送りけれ

積田は雪野の花見るはしらさかれ
かりくらむ紫山子の袖や我手の雪
雛子みても雪や一重ての上捨て只し
杜若ら流るを何言
きれいハつて菖蒲もよしみ雪の花
麦生てよむ児もや冬けむり
葛の葉乳かれて人きくらんむさし雪
凡や何して樹木起信子へ業の子
いひつのいはとく
くすりの味ましてても雪の枕かな
古き代を志めひて
雪のうちにちらして咲る火桶かな

かしの林の去よりおこる火桶ゑゑ
外手をとうしてくる人今針す
埋火もき見や後の身文るねと
きりしらされ来る嘴し火焼かれ
住つの叔の国らや置火焼
次らの登寿良の清游かこうし行かれ
出羽松館
埋火や醒めしても宮のうけ法し
又ひむ川菜の子も並ふいろるかれ
貝隣翁の鐘
稚ものやしらぬ翁に丸阪仲
十二月九日一井亭にて

秋よし　宗祇の夕月夜
月さへつき沙竜ハ夢路に沙なれ
河豚汁や鯛もあるのに無分別
河ぞ水舟吉も奴僕がつれてかく醒
のきし〳〵と古る
兄弟のくすしみくむやうくとけ
素にも千世ひて熟田守なる
おそひ木ぬ鯱鉾うつゝく七里まで
ひさわくる胸の内西や宮の西
いさ手繰て何うち玉ゆき
　自画自讃
ひらめしきすゞやあつしれの椿木笠

石山は石ゆたよ〳〵ト露うち日
信州の字花を人〳〵待ひ乃対
あし〳〵経きよ福しろの水盃をみせん
　与夜人文
あしゝぬ虎や狗よるき安しれ
　ぬれ専うて
琵琶行の夜や三線は北しうち
精妙に琵琶きく杯の露うち日
はまみ之麿ひむ筋うつ徒はる
　荻花に除如をかくうて
去嫡の嬌を見ゝろしのさちうき
納豆きる音はやまし弾うき

からさけも空也の痩も寒の内

月花の愚に針立ん寒の入

かくれけり師走の海のかいつぶり

年くれぬ笠きて草鞋はきなから

自悔箴

めてたき人の数にも入む老の暮

画讃

ゆく年や猿にきせたる猿の面

うかうかと年よる人や古暦

年わすれ三人よれは寝覚かな

煤掃や暮ゆく宿の高いびき

年の市線香かひに出はや

月やとりのさくらきらし手のうち

旅寝して見しや浮世の煤はらひ

旅行

煤掃ハ杉の木の間の嵐かな

すゝ払ハ己か棚つる大工かな

深草の詞

古伏しや鶴の声住年の暮

ぬす人にあふた夜もあり年の暮

何にこの師走の市にゆく烏

五百老之旅の後しけく

春や立まことむは師走

芭蕉庵の春れハ風情も師走哉

は郷の奈良一とせ浪花にて即し玉へる
を手紙にて披露の節りしをきゝて
見や世に珠すて流しぬ古盆子
後の法雲がむかし桃丸無は
皆うみて紛々を友ずやとしてまりぬれ
すさ埋火ゆきしやうれ朧月未京都を
立わたる乙州か新宅にまるとゆるらて
人に家をかうたるこゝろ春を待
道々のこし頃ハしられ手のこゝれ
此く年やくそくうる人ぞ梅の花
其川の桃さく手わすれするきけんば
給ひいけるかぬ此き手のこと

春夢亭手記

其季ははを雀の吹かぬ出生すか
ふ家は庭たゝきうり手の房
まうかも三十らちかりし餅の音
海待る千代す常の了宗と給ひて
江戸の浦の年とし物や柴一把
くれして餅を餅けまひの紙
みなあた二尺の七五三を手の掌

世季くく読
かちよしハ枝食坂ま嘉見の花

釣よきを海松高そ汀に波
酒のみ尽きる人の終り
月花もなくて酒のむひとり哉

貞徳宗鑑守武之画像
三翁ハ風雅の天工をうけ得て心匠を
萬歳に伝ふ此かげにあそバん者の徒の俤
ゑを慕ふさる事や
月花の是やまことのあるじ達

題芭蕉
此椎の実よし椿梅桃木に

四山の銘
物ひとつ瓢ハかろき我世哉

布袋画讃
ものほしや袋のうちの月と花

老讃
越の新潟にて
海にふる雨や恋しき浮身宿
家はみな杖にしら髪の墓参
深草や是も瑞草火除の家

画讃
ろほくし香を読みて枯野紙
はじめハ之庵をとひ此まねして一首に

本邦画讃とゆれハ新町の為成か岸
餅ハ花やかさしにさそるよめの春
大津の秋ハはみ多ゆひき
梅干ニつらふ寅多ゆき緒ありて
辛崎夜雨
琵琶の湖に雨よ降る松は律
粟津晴嵐
さて然うゑ人の濡るる　市の声
矢橋帰帆
夕のまみ赤石の浦を帆の影て
比良暮雪
さむく雪　白衣の下て稍比良の雪

石山秋月
汐やらぬ湖より出る秋の月
瀬田夕照
きぬかすかきのぬ綱の夜の袖
堅田落雁
かくの文かくして雁に片便宜
三井晩鐘
鐘ハ丘つれハ春し　花の鐘
右八景八宗房の時の吟なりと云
九のとき此去秋市中に住て吟せし屋を
深川の庵にて続ては長安ハ古来名利の

此宗匠ハいさ生まれもの八行路にてと
いひけん人の如しと覚侍るハ此翁のともがき
なりや
宗の己人于此業を本業として嵐々の由
消息
三十里尾張大根力まかしこれ
画賛
たのむぞよ寝酒なき夜の古紙衾
けし炭に薪わる音か小野の奥
蕪うつして
深川や相こしの芭蕉庵のこと
阪中見えし魚ましこれや魂すみれ

ふところに芭蕉庵を遠くいとふみぞ
汲し桃や此翁ハ翁とも　古柏